

六十年代文学における アンティ・ニヒリズム②

——レスコフの小説「行きづまり」、「僧院の人々」
について——

直野 敦

三

小説「行きづまり」の重要な主人公の一人で、作者レスコフの分身ともいえる医師ローザノフは、六十年代の急進派ニヒリストの革命運動に参加するが、その小児病的なあり方や偽善、便乗主義などに幻滅して運動から離反し、革命運動の批判者の立場へと転換する。これは、六十年代のはじめに急進派に近い立場にありながら、六一―二年の文壇、論壇における思想的論戦の中で急速に革命運動、革命思想の否定者の立場へと転じた作者自身の人生経験に基づいていることは明らかである。このように著者の反ニヒリズム思想の代弁者であるローザノフは、作品の中で、六十年代の革命運動に内在していた矛盾や否定面を痛烈に批判しはするが、ニヒリストの提起した社会革命にかかるとのような社会的理想も提出し得ない。革命運動の現実と自己の革命思想の理想主義との矛盾に追いつめられて破滅する

リーザとライネルという二人の革命的知識人に対置される「現実主義者」、「漸進主義者」として描かれているローザノフ自身、革命運動の退潮期の中で自己自身の進むべき道を見出さないままに物語は終る。また、この作品の中で作者がもっとも深い共感をもって描いているジェニ・グロヴァツカヤは、炉辺の幸福に安住の地を見出した女性の姿として、リーザの悲劇的運命とは対照的に、肯定的な人間像としての意味をになっているけれども、しかしリーザをふくめて六十年代の文学（ツルゲーネフ、チユルヌイシエフスキー等の作品）に描かれた多くの女性像、人間的、社会的解放をめざして努力する新しい世代の女性たちの理想にかわり得るだけの積極的な社会理想のない手であるとは言い難い。

こうして、ニヒリストに対立する人間像として肯定的に描かれているローザノフやジェニも、小説の中で新しい社会的理想を示し得ないままであるが、著者が肯定的に描いている他のより重要でない作中人物についても同じことが言える。ローザノフの同僚の医師、ロバチエーフスキーは、革命運動の渦にまきこまれて苦しむローザノフを批判的にしかし同情をこめて見守りながら、医師としての自己の研究と仕事に没頭する。また、ローザノフの大学時代の友人、予審官のネチャイも、苦しい生活に喘ぎながら自己の職務を献身的に果す人物として描かれる。革命運動から離反しようとするローザノフは、これらのつつましい「生活者」の姿に対して羨望の念さえ抱くが、これは革命運動の退潮期における転向者に共通の心情であり、レスコフは

この点を鋭くとらえていると言える。しかし、ロバチエーフスキーやネチャイの人間像は、この作品においてはエピソード的にあらわれるのみで、作者自身の社会的理想をになう積極的主人公としての意味は持ち得ていない。

レスコフは、六十年代の革命家と革命運動を批判し、断罪する政治小説としてのこの作品において、積極的主人公の創造が必要なことを自覚しながらも、まだこの時期において、そのような積極的主人公の思想的裏づけとなる自己自身の社会観を確立し得ていなかったと考えられる。ただ、わずかに、小説の末尾において、若い商人ルカ・ニコノヴィチ・マスリヤニコフの姿を——物語の筋とは無関係に——描くことによって、作者がこのような積極的主人を提出しようとした意図が汲みとられる。ルカ・ニコノヴィチ・マスリヤニコフは、小説の第一部で、ジェニ・グロヴァツカヤの住む郡庁所在地の町に絶大な権力をもって君臨していた商人ニコン・ロジオーノヴィチ・マスリヤニコフの息子である。彼は父の死後うけついで事業を拡大せずに土地を買って農業経営に主力を注ぎ、義弟と協力して農奴解放後の地方都市の社会的、文化的発展のために努力する人物として描かれている。「消防隊、職業学校、病院」などを創設し、劇場を建設する計画も持っている。そして、この小説は、マスリヤニコフが、都会の批評家たちの言辭の無内容性を批判し、自己の社会的活動の意味を強調する所で終っている。

このような商人、企業家の姿を未来のロシア社会をになう積極的主人公として描くことは、現実のロシア社会において可能

であった(しかし実現されなかった)近代化の一方、それまでのロシア文学において人間の個性を抑圧する「闇の王国」の支配者として描かれていたロシア商人層がロシア社会の近代化を——資本主義の発展にそいながら——推進する勢力へと転化する可能性に根ざしていたと考えられる。六十年代の文学におけるこのような意味での積極的主人公としては、ゴンチャロフの作品「オブローモフ」におけるシュトルツ、「断崖」のトゥーシンなどがあげられる。特に、アンテイ・ニヒリスト小説としての要素が強い「断崖」の後半においては、ニヒリスト、マルク・ヴォロホフの無意味な破壊的言辭や行動、そしてまた「余計者」、「ディレッタント」のタイプであるライスキーの空虚な冗舌や熱狂と対照的に、円満な人格者であり、合理的な企業家である貴族トゥーシンが理想的人間像として描かれている。レスコフの主人公、商人マスリヤニコフが農奴解放後の社会において、かつて貴族階級の独占していた政治的指導権に近づき、地方都市の権力者として下からのしあがる新しいタイプの商人であるとすれば、トゥーシンは数千ヘクタールの森林を所有し、農奴の労働力を使用した大規模な製材工場を経営する新時代の地主、資本主義の発展に適応を見せる新しいタイプの貴族である。トゥーシンについては、「断崖」の主人公の一人ライスキーが次のように最上級の讃辭をつらねているが、これは作者ゴンチャロフが、このような企業家の人間像にどのような重要な意味をみとめていたかを示している。

「トゥーシンたちこそ、わが国の真の『活動の党』、わが国

の着実な『未来』である⁽²⁾。また、ライイスキーは、「ザヴォロージェ(ヴォルガ河下流)地方のロバート・オーエン」とまでトゥーシンを高く評価する。このようにゴンチャロフは、資本主義の発展によるロシア社会の近代化に大きな夢を託し、ニヒリスト、マルク・ヴォロホフ等の社会革命の理想を否定しているが、このような立場は、商人マスリヤニコフを積極的主人公として描こうとしたレスコフの立場にも通じるものであった。しかし、資本主義の発展によるロシア社会の近代化が、政治的な革命をぬきにして考えられている所に、ゴンチャロフやレスコフの思想的弱さがあり、彼らの考えとは正反対に十九世紀後半のロシア社会は解放運動の激化によっていどられることになる。このような歴史的现实と、ゴンチャロフやレスコフにおける社会的理想との間の矛盾は、「断崖」におけるトゥーシンの人間像の文学的真實性を稀薄にする結果となり、「行きづまり」においては、商人ルカ・ニコノヴィチ・マスリヤニコフの登場が、物語の展開になんらの有機的関連を持たず、ただ機械的にニヒリストの人間像に対置されるものとして小説の末尾に無理に書きそえられるという結果へと導いている。レスコフにおいては、これは、「行きづまり」以後の作品から明かなように、農奴解放後のロシア社会の資本主義化の過程に対して彼が後に否定的な態度をとるようになったことと結びついている。そして又そのことは、「行きづまり」における唯一の積極的な主人公をマスリヤニコフとした作者自身の思想的立場が、きわめて根の浅いものであり、この時代の作者の思想が大きく動揺

していたことを物語っている。事実、この作品の中でも、イギリスに長く潜在した革命家ライネルは、イギリスには「自由がある」というジュニに反駁して言う。「名目的な自由がね。飢えに抗議し、パンがなくて死ぬ自由が」。これは、レスコフが、ゴンチャロフのように資本主義の発展による西欧的近代化の道に楽天的でなかったことを示していると言えよう。

名目的には貴族の身分に属するとはいえむしろ農民の子弟に近い境遇に育ち、大学教育も満足に終えることなく、種々の職業についてロシアの各地をめぐる歩き、ロシア社会の各層、農民、商人、職人、分離派教徒などの生活をつぶさに見聞していたレスコフにとっては、六十年代の革命派の現実無視の理論がうけ入れ難いものであったとすれば、マスリヤニコフ、トゥーシンによってロシア社会の近代化が実現されると考えるには、レスコフ自身余りにもリアリストであったと言えよう。

したがって、アンティ・ニヒリスト小説「行きづまり」の積極的主人公としてのマスリヤニコフは、作者の思想との深い内面的なつながりを持たないいわば「たてまえ」の理想像であった。したがってまた、このようなタイプの理想像は、その後のレスコフの作品に二度と描かれることもなかった。

(1) Н. С. Лесков, Собрание сочинений. М., 1956. Том 2, стр. 707.

(2) И. А. Гончаров, Обрыв. М., 1950. стр. 730.

(3) Н. С. Лесков, там же, стр. 114.

四

レスコフの二番目の、そして最後のアンティ・ニヒリスト小説である「いがみ合い」は、六十年代後半、ナロードニキ運動の激化する時代に発表され、ドストエーフスキの「悪霊」とともにカトコフの「ロシヤ報知」誌上を飾ることになるが、この小説の検討は別の機会に譲ることにして、「いがみ合い」の前に書きはじめられ、様々に構想の変更を経た後七二年に発表された小説「僧院の人々」を通じて、「行きづまり」後の作者の思想的発展の方向を簡単に見ておきたいと思う。

「僧院の人々」において、レスコフは、ロシヤの草深い地方都市で民衆の生活に密着して生きる聖職者の姿を描くことにより、はじめて自己の思想と内面的な結びつきを持つ積極的主人公を文学的に形象化し得た。また文学形式の上では、それまでの恋愛を物語展開の筋立とする古典的形式の枠を破って、より長期の歴史的展望の中に主人公の運命をたどる「年代記」という独自の物語形式を生み出している。また、この小説は厳密に言ってアンティ・ニヒリスト小説の系譜に属するものではないが、しかし六十年代のニヒリスト人間像のその後の変質過程を描くことにも多くの比重が与えられており、彼のアンティ・ニヒリスト小説とも深い関連を持っている。

レスコフは、「僧院の人々」において田舎町における聖職者——主僧のサヴェーリー・トゥペロソフと補祭のアヒーラ——を主人公とし、農奴解放前から解放後にかけての時代にお

けるこれらの聖職者をめぐる様々の問題と人間関係を描き出している。レスコフが、キリスト教の信仰を擁護し、世俗権力と対決する殉教者タイプの聖職者の姿を物語の主人公に選んだこと自体、六十年代革命派の唯物論、無神論の思想に対する挑戦の意味を持っているが、より具体的には、六十年代の革命派の作家の多くが神学校出身でありながら、宗教界の腐敗を暴露したことへの反撥もあった。

作品には、この町のニヒリストの代表として溺死者の屍体から科学教育のためと称して骸骨をつくる学校教師ヴァルナーヴァ・プレボテンスキーが登場し、この骸骨の処理をめぐって補祭アヒーラとの間に絶え間ない紛争が生じる。しかしこのニヒリスト像はすでに革命家としての戦闘性を失った、牙を抜かれた無害なニヒリストであり、しかもどこかに暖い人間味と誠実さを備えた人間として描かれている。

これに対して、かつての有力なニヒリストであり、「パンのために」転向して農奴解放後の官僚機構にもぐりこみ、保身と栄達をはかろうとするテルモシヨソフ、同じく「若気の過ち」から青年時代に革命運動に関係したためその古傷の発覚することを恐れてテルモシヨソフの脅迫に屈服する貴族官僚のボルノヴォロコフの描写には作者の激しい批判がこめられている。このような旧ニヒリストの転身と適応の諷刺的描写には、六十年代の革命運動における思想的な根の浅さに対するレスコフの批判がこめられていると同時に、このような時局便乗主義者に大きな権力を与える所の新時代の政治・社会体制に対する

レスコフの本能的な嫌悪と敵意も表現されている。ここには、農奴解放後における資本主義の発達にともなう近代化が精神文化における祖国喪失の危険をはらんでいることへのレスコフの認識がある。トゥペロゾフは言う。

「我が国では、信仰を持たず、自分の祖国を嘲笑し、人々の評価においては、家庭の絆の神聖さを無視したり、何でも手当り次第に受入れたりすることが教養人の資格とされてきた……しかし、精神的な独立が必要となると……」

これはもちろん、保守的な伝統文化擁護の立場からする批判であるが、その底にはロシア社会の上からの改革を自分たちの生活にとって異質のものと感じる庶民の生活感情との結びつきもひそんでいられることを見逃すことはできない。このような精神的独立を志向する聖職者は、教会を民衆支配の精神的支柱としてしかみとめない政治権力にとっては邪魔者ではない。聖職者としての独自の立場から民衆の利益を擁護し、熱烈な信仰の立場から世俗権力の倫理観の欠除を非難するトゥペロゾフは、狂信者の烙印をおされて、その地位を追われる。彼のこのような理想主義は思想的立場は異なるが、「行きづまり」のリーザやライネルの理想主義にも通じる一面を持っており、ここには、すでにアンティ・ニヒリスト小説の作家としての立場を脱して、十九世紀後半のロシア社会の冷徹な批判者、リアリスト作家として大きく成長して行くレスコフの思想的出発点がうかがわれる。そしてこのような思想的立場は、後に原始キリスト教の理想をふりかざして激しい社会批判へと進んだトルスト

イとの思想的接近を準備する基盤でもあった。その意味でトゥペロゾフの人間像は、レスコフの文学にとって大きな意味を持っていたと考えられる。

トゥペロゾフのように民衆の生活や思想に密着した聖職者のあり方を、旧ニヒリストで今や官僚機構の有能なスパイとなつたテルモシヨロゾフは、ベテルブルクへ送る報告書の中で、「聖職者は民衆にきわめて近く、したがってもっとも危険な分子である」と書いているが、この中には一面の真実がふくまれていた、と言うべきであろう。

「僧院の人々」のもう一人の主人公、補祭アヒーラは、トゥペロゾフの知識人的風貌とは対照的な庶民的人間像である。アヒーラは、その超人的な肉体力においても、幼児のような善良さと無邪気さにおいても、文字通りロシア民衆の中から生れた自然児である。アヒーラの人間像は、ロシア民衆の中にひそむ未分化の混沌とした原始的生命力の象徴であり、民衆の豊かな可能性の形象化である。アヒーラは主僧トゥペロゾフに無限の信頼を抱き、トゥペロゾフの死は彼自身にとって一切の人生の意味が失われることに等しいが、同時に彼の生き方は、その向う見ずな衝動的行為によって聖職者というよりは、彼自身その血をうけているコサック兵の本能的な生き方に近い。アヒーラには固有の思想も、社会的理想もなく、精神的にはトゥペロゾフのキリスト教的理想に全面的に支えられているが、しかも「死の否定」そのものである彼の生命力の中にレスコフはロシア民族の楽天的性格を文学的に形象化し得た。トゥペロ

「ゾフとアヒーラの二人の人物を創造することによって、レスコフは「行きづまり」において果し得なかつた積極的主人公の創造に成功したと言える。これ以後のレスコフの思想は、とくにキリスト教に対する態度においてまた大きな変化を見せるが、その力強い独自のリアリズムに支えられた作品の中で文学的結

晶化を得ることになる。

- (1) Н. С. Лесков, Собрание сочинений. М., 1956. Том 4, стр. 202.
- (2) Н. С. Лесков, Там же, стр. 209.

(一橋大学講師)